北星学園大学文学部北星論集第54巻第２号（通巻第65号）（2017年３月）・抜刷

張文環の日本語文学作品における表象傾向の分有と深化

――一九四〇～四三年を対象として――

宮　崎　靖　士

張文環の日本語文学作品における表象傾向の分有と深化

――一九四〇～四三年を対象として――

宮崎靖士

要旨

本論では、張文環が標題の期間に発表した日本語文学作品のうち小説を対象として、その表象傾向の確立とそれ以降の展開、及びそれが同時代状況の中でもち得た意義を明らかにした。表象傾向については、四〇年に発表された『山茶花』が、共同体を舞台とする物語の中に、女性の生き方をめぐる物語と、進路選択をめぐる物語を包含していることを論じ、それ以降の短編作品では、この三つの物語が個々に取り上げられて展開されていることを跡付けた。そこで注目されるのは、個々のテキストのプロットが、異なる方向性をもつ、複数の要素の偶然的な連関によって織り成されていること、そして更には、主人公の生き方や主題的な事象に対する特定の評価がテキスト中に伴われないことである。そのような表象傾向がもつ意義については、同時代の読者に、共同体、女性、進路選択という問題系の存在を示し、それらを主体的に考える個人の確立を指向した点に求められる。

目次

はじめに
Ⅰ　『憂鬱な詩人』の位置づけ
Ⅱ　『山茶花』と同時代状況
Ⅲ　共同体に観察点をおいた物語
Ⅳ　女性の生き方をめぐる物語
Ⅴ　進路選択をめぐる物語
Ⅵ　まとめと終章
注
付記

はじめに

本論では、張文環（一九〇九～七八）が一九四〇～四三年に発表した日本語文学作品のうち小説[一]を対象として、その表象傾向の確立とそれ以降の展開、及びそれが同時代状況の中でもち得た意義を明らかにすることを目的とする。そのために本論では、新聞連載の長篇小説『山茶花』（『台湾新民報』一九四〇年一月二三日～五月一四日）を発端とする表象傾向の展開を類型化し、その上でその背景となる同時代状況との関連を検証していく。

そのような検討は、日本統治期のうち特に一九三〇年代後半以降に台湾で発表された日本語文学作品を具体的に分析し、その蓄積を同時代状況とあわせ見ることから、個々の書き手における日本語への関わり方を明らかにしていく試み[二]の一つとなる。それは更に、そのような個々の書き手の営みの集積として、日本語文学の姿と意義を改めて見出そうとする試みの一環ともなる。

そして、そのような検討を最も確実に、かつ効果的に行うことが可

キーワード：張文環、日本語文学、表象傾向、一九四〇～四三年、同時代状況

能なのが、張文環においては一九四〇～四三年という時期だと考えられる(三)。まず四〇年から検討を開始する点については、このタイミングが、台湾総督府による新聞漢文欄の廃止（三七年四月）以降の「文学的空白期」を経て、台湾詩人協会設立から台湾文芸家協会への改組（三九～四〇年）を契機とした内台人共同による日本語文学の興隆が始まる時期にあたることが重要となる。そしてこの時期に、張文環においても、日本語小説がコンスタントに発表されるようになり、それと台湾の文学状況との有機的かつ個別的な関わりが観測可能になるのである。そして検討時期を四三年までにした理由は、特に台湾決戦文学会議（四三年一一月）以降、文学者への戦争協力の要請が強化され表現への統制が顕著になるとともに、『文芸台湾』『台湾文学』等の廃刊にあわせて発表媒体も減少することから、個々の作家の表現傾向と、それを通じた時代状況への独自な関与が抽出困難になる(四)と考えたためである。

以下、本論の問題設定と関わる二種の先行研究と、それらとの関わりにふれておきたい。第一には、日本統治期における張文環に関する従来の研究との接点をあげたい。件の研究の中でも、例えば葉石濤氏は、張文環について「一九世紀の写実文学の巨匠であるトルストイやバルザックに極めて近く、台湾民衆の四季の風俗や習慣についての描写を通して、彼らの伝統生活を活写し、また、その深い人道主義が彼らを包み込んでいる」とする(五)。また柳書琴氏は、『山茶花』を含む張文環のテキストに関して、その「小説世界」が「植民地統治という外圧に出会い、絶えず衝突して次第に秩序を失っていく台湾人の空間」であり、「元来この空間の中で自ら築き上げてきた経済生産体系や純朴で美しい人情や伝統」が、「植民資本がもたらした新しい勢力や経済や価値の衝撃を受けて、遂に危機に瀕した」姿を描いていると述べている(六)。

それらに対して本論では、右のような「伝統生活」の「活写」や、危機に晒された「美しい人情や伝統」に対するノスタルジーの喚起という読後感を与え得るテキスト傾向が、ある時期において固有の時代状況との関わりから形成されたものであること、及びその内実が、件の「活写」に止まらず、かつノスタルジーにも収束しないものであることを明らかにしていく。即ち本論の試みは、従来の張文環研究に対しては、テキスト系列の類型化と同時代状況との関わり方を重視することから検討の時期を限定しつつ、ただしそれをより精密に発展させるものともなるだろう。

そして第二には、一九三〇年代後半以降に日本語文学が台湾社会で果たした役割に関する先行研究との関わりがあげられる。これについては、藤井省三氏における、日本語文学作品の生産と享受のサイクルを「言語的同化」としつつ、それを通じた「共同意識」及び「台湾大のナショナリズム」の形成がこの時期に生じたとする指摘が重要となる。そのような事態の基盤として氏は、特に日中戦争開始以降一九四一年に至るまでの「日本語理解者」の急増と、それに伴う読書市場の拡大を指摘する。そして件の事態は、特に周金波『志願兵』（『文芸台湾』四一年九月）が描いたような、志願兵となっていく心理過程や、戦死を覚悟することでのみ日本人になるという心理、及びそこから中国大陸、南洋などに対する優越感を確保するという「論理」への「共感」が加味された結果として論じられている(七)。本論では、そのような藤井氏における、いわば巨視的な視点からの事態の把握に対して、張文環の個々のテキストの表象傾向の検討を蓄積するという、微視的な立場からの検討を提示することで、この時期の日本語文学に対するより十全な認識と視角を得ようとするものともいえる。具体的に

（二）

は、右の「共同意識」や「ナショナリズム」の形成（八）に関わる張文環の独自なスタンスを明らかにし、藤井氏の述べるような「言語的同化」と並行しつつ展開されていた、更に別の営みに光を当てていく。

以下本論では、張文環のテキストに関して、語りの形態と物語内容の特色に着目し、各テキストを要約しながら、表象傾向のポイントを逐一明確化していくことを一貫した方法とする。順序としては、Ⅰ節で、以下の類型化の例外となる『憂鬱な詩人』（『文芸台湾』一九四〇年五月）の位置づけを明確にした上で、Ⅱ節において『山茶花』と一九四〇年頃の時代状況を検討し、以下、ⅢからⅤ節にかけて『山茶花』から分有されたと考えられる三つの表象傾向を検討していく。そしてⅥ節において、それらの検討をまとめ、更にそれがもつ意義を論じる。

Ⅰ　『憂鬱な詩人』の位置づけ

具体的な検討をはじめるにあたり、まずは『憂鬱な詩人』の位置づけを明確にしておきたい。このテキストは『山茶花』の連載と並行して発表されたものであるが、以下に検討するその他の日本語小説とは異質であり、唯一、類型から外れるものとなる。

このテキストは、三人称的な語りの中で、時に詩人の簡に焦点化されつつ語られる。その他の主な登場人物としては、簡が同行した「内地」人の移動楽団のメンバーであるピアニストの富田みよ、及び「先生」と呼ばれる声楽家の吉野女史があげられる。講演旅行の日程を終え、台湾を離れるメンバーを簡が見送りに行く状況設定を軸として、みよの百貨店での買物にも同伴しつつ、そこから移動講演中の出来事や、簡の夫婦関係にまつわる事等が回想される。その中で、みよにおける「先生」への反発的な感情や対応が話題となりつつ、そこにおける微細な言葉のやりとりや心理の描写から、簡がみよに寄せる好意が浮上する。しかし結果的にその思いは受け入れられず、台湾に残る簡と「内地」に戻るみよとの立場や関心のちがいを浮き彫りにして物語は終わる。

『憂鬱な詩人』に関して、王姿文氏は、このテキストで描かれる「憂鬱」を、「「近代的青年」の軽い恋を求めて帝都東京を偲ぶ」心による昭和期のモダン的要素を反映した表象として評価している（九）。そのようにこのテキストの特色は、台湾人と「内地」人の間の、遊戯的な恋愛感情をめぐる関わりを主な物語内容とし、それに加えて西洋音楽や百貨店といったモダン的な要素がテキストの随所に取り込まれている点。そしてそのような状況設定における微細な内面の動きが心理小説的にクローズアップされている点に求められる。

その一方で、張文環における一九四〇年以降の日本語小説に対する従来の評価は、「台湾民衆」の「伝統生活」を的確に表象した（一〇）ことに注目するものが一般的といえる。実際、本論が検討する『山茶花』より後に発表されたテキストでは、殆ど「内地」人は登場せず、台湾人どうしの関わりが描かれていくことになると同時に、モダン的な都市文化の要素も極めて希薄になり、更に心理小説的な傾向も後景化するといえる。すると、一九四〇年以降における張文環の表象傾向は、『憂鬱な詩人』のような方向性（一一）を当初は保持しつつも、しかし実際には、次に検討する『山茶花』に含まれるいくつかの方向性が継承・展開されることで形成されたという見通しを得ることが可能になる。即ち、『憂鬱な詩人』は、それ以降の表象傾向と比較するとき、継承されなかった可能性として位置づけられ、その一方で『山茶花』に含まれる表象傾向を明らかにする必要が生じてくるのである。

Ⅱ 『山茶花』と同時代状況

そこで『山茶花』の検討へと移行しよう。このテキストは、黄得時が『台湾新民報』において企画した「新鋭中篇創作」特輯（一九三九～四〇年）の第五篇として発表された（一二）。この特輯がもつ台湾文学史上の意義については、陳淑容氏の指摘がある。氏は、この特輯に関与したのは、当時最年長でも三〇歳の、「完全に日本統治下で成長し教育を受けた」新しい世代であり、新聞漢文欄の廃止以降に、「前の世代の漢文作家とは異なる」文学のあり方を示すべく、「従来とは異なる物語の語り方」で「純文学作家」が日本語読書大衆に向き合った点に注目している（一三）。

『山茶花』は、RK庄という山村を舞台として、楊朝賢（賢）、及びその従姉妹であり賢と同学年の簡氏美娟（娟）、そして娟の姉の錦雲を主な登場人物とした、十数年にわたる期間の出来事を全一一一回に分載して記す。テキストは三人称的な語りであり、その中で、時に賢、娟、錦雲に焦点化しつつ展開される。テキストは全一五節に区分され、それぞれにタイトルが付されている。便宜上、それに通し番号をつけた上で紹介すると、①孟麗君、②映雪、③残されるもの、④開眼、⑤別離、⑥村の娘、⑦交流、⑧縁談、⑨巣立ち、⑩未亡人、⑪復活、⑫初恋、⑬因習、⑭マノン・レスコオ、⑮姉帰る、となる。

これらは賢や娟の成長にあわせた時系列をなしており、①～⑤までは二人がRK公学校へ通っていた時期の出来事。⑥～⑩は賢の中学時代、そして⑪以降は賢の高校時代にあたる。その中で、賢に関しては、村の公学校を卒業後、村ではじめて中学への進学を果たし、その後も高等学校へ進み、更には東京留学を決めるまでに至る。なお中学進学後は村を離れたため、それ以降は村へ帰省した折の言動が記されることになる。ただし中学卒業後に医専への進学をせず、高等学校の文科へ進学したところから、郷里における出世の期待から外れた形で進路を選んでいくことになり、そのような進路の選択に際しても、明確な指針や大きな決断が描かれていない点が見逃せない。

（四）

一方、娟については、家の事情で心ならずも公学校を中退し、その後は村の娘として家の手伝いを中心として暮らす生き方が描かれる。更に錦雲に関しては、結婚を果たし、その後嫁ぎ先で姑との折り合いが悪く苦労するが、そこから子どもをもうけるまでが語られる。そのような展開の中で物語の終章をなすのは、賢が高校在学時に帰省した折に娟に抱いた恋愛感情をめぐる次第となる。賢の思いを娟は受け入れるが、その初恋は賢の進路を慮る両親からの反対によって潰える。その後も二人は復縁するが、賢の東京行きに伴い離れることになった折に、娟が親に婚約を強いられ、それを賢に告げた手紙に対して、賢がそのまま結婚することを薦める返信をした場面で終わる。また、テキストの標題となっている山茶花に関しては、村へ帰省した折に賢が発見した、田舎としての故郷がもつ純粋さや純朴さの象徴として記され、かつ賢が失恋をした折に訪れる、故郷の村よりも更に奥地にある部落に「山茶花部落」という名がつけられている。そしてその背景には、成長につれて故郷の村が、鉄道建設等により近代化されていく事態があるとともに、故郷は自身の傷心を癒してくれる回帰すべき場所ではないことも確認されていく。

すると『山茶花』は、賢の進学プロセスを追跡しているとともに、右に確認した「孟麗君」「映雪」「マノン・レスコオ」といった節の名称（一四）などからも窺われるように、女性の生き方をめぐる問題も重要なテーマとしていることがわかる。更に、賢が中学へ進学した後は、村へ帰省したときの言動が（右の「⑦交流」を例外として）基本的

に描かれ、錦雲が結婚した後は、やはり帰省時しかその言動が描かれない点、及び村の外で生じた他の出来事が描かれる場合も、多くの場合後日の聞き書きという体裁をとる(一五)点等を勘案すると、『山茶花』の舞台は、あくまで件の登場人物が生まれ育った村であると理解できる。即ち『山茶花』は、ある村(共同体)での出来事を描く、そこに観察点がおかれた物語として基本的に理解することができ(一六)、そのような基盤の上に、娟や錦雲といった女性における、家や結婚制度との関わりに規定された生き方をめぐる物語と、賢の進路選択をめぐる物語が定着されていると整理できるようになろう(一七)。

そして本論が注目するのは、そのような物語が、『山茶花』以降の短編作品では分有される形で展開されていく点となる。即ち、a共同体に観察点をおいた物語、b女性の生き方をめぐる物語、c進路選択をめぐる物語という三通りの表象が展開されるのである(一八)。

そこで、そのような表象傾向と接点をもつ同時代状況として次のようなものが注目される。それは、『山茶花』が連載を終える一九四〇年半ばが、「内地」において第二次近衛内閣が成立(四〇年七月)し、大政翼賛会(四〇年一〇月結成)に代表される新体制運動(一九)が開始される時期であり、その動向が台湾にも及ぶタイミングとなっている点である。この時期における台湾文壇の動向に関して、例えば柳書琴氏は、「近衛内閣組閣以降、「皇民奉公会」が成立するまでのほぼ一年間、台湾の文化と文学全体に対する政策は、その前後の時期に比較して緩やかで、かつ具体的方針の欠落したものとなり、ために(中略)台湾文壇に発展の余地を提供した」とし、その代表例として黄得時の、特に「台湾文壇建設論」(『台湾文学』四一年九月)に代表される論説をとりあげている(二〇)。なお、「皇民奉公会」(二一)の設立は四一年四月であった。氏の指摘は、新体制運動がもつ自由主義的傾向に対する、台湾の文学者における「流用」の試みを広汎なものとして把握する見解といえる。

更に橋本恭子氏は、四〇年頃に台湾文壇で使用されていた批評用語である「外地文学」と「台湾文学」をめぐる議論に注目し、その両者の一体化に拍車をかけたものが、大政翼賛会文化部における「地方文化」「外地文化」の振興を掲げる政策であったとする。そしてこの時期に「外地文化」や「外地文学」の担い手として日本人も台湾人も積極的に動員されるようになり、「独自の文化を樹立しようとする台湾の文芸界には追い風」となったと述べた(二二)。なお、既に創刊(四〇年一月)されていた『文芸台湾』に対抗して、台湾の土地に根ざした文化や文学の創造を指向していたとされる(二三)『台湾文学』が創刊されたのが四一年五月、『民俗台湾』の創刊が同年七月であった。そして、前にふれた黄得時の論説が掲載されたのは、『台湾文学』の第二号である。

そのように「台湾文化」をめぐる議論や表象が社会的に要請される時代状況の到来に先んじて『山茶花』は発表されている。そして、この作品で得た好評(二四)を契機として、張文環が日本語作家としての地位を確立していくことを勘案すると、『山茶花』における件の三つの表象傾向は、「台湾文化」をめぐる来たるべき時流に関わる具体的な問題系を時流に先駆けて提示し得たといえるようになるのではないか。そして一九四〇年以降、『山茶花』に取り入れられた三つの物語が継承されていく点については、それらを張文環が継続的に展開するに値するテーマとして選択し、自らの表象傾向として確立するとともに、それらを通して時流と読者に関与しようとした結果として推測可能になるのである。以下、件の三つの物語の展開を追跡していこう。

(五)

Ⅲ　共同体に観察点をおいた物語

この区分に含まれるのは、『部落の惨劇』（『台湾時報』一九四一年九月）、『論語と鶏』（『台湾文学』四一年九月）、『夜猿』（『台湾文学』四二年二月）、『地方生活』（『台湾文学』四二年一〇月）、『迷児』（『台湾文学』四三年七月）の五作品である。固有の共同体の中に中心人物を用意し、そのような限定（条件）の中で、そこで生じる人事を前景化しつつ、それをも含む共同体の動向を描く点に、共通した特色を求められる。

なお、そのような特色は、以下に述べるⅣ、Ⅴに区分されるテキストの中のいくつかにも認められるものである。ただし、そのようなテキストにおいても、女性主人公の生き方が中心的に描かれているものはⅣに、そして主人公の進路選択が中心的な話題となっているものについてはⅤに区分している。Ⅲで扱うのは、あくまで共同体の動向を中心的な話題としていると判断できるものとなる。そしてそれは、Ⅱで論じた『山茶花』において基盤をなしていた物語をうけついだものだといえる。以下、具体的にそのポイントを検証しつつ、『山茶花』には認め難い新しい要素をも確認していこう。

第一に『部落の惨劇』は、婚姻を通じた秩序と社会道徳の形成により「数百年の平和」を保ってきたとされるR部落を舞台とし、そこで生じた出来事を二つの時間に分けて記す。第一の時間は、大正八～九年という設定であり、主な登場人物は、呉萬壽、鄭淑花（萬壽の媳婦子）、林猶得（淑花の従兄）となり、テキストは時に萬壽や淑花に焦点化されつつ展開される。萬壽は媳婦子制度に不満をもっており、自由を求めて村を飛び出す。その折に猶得は淑花に言い寄るが、そのことを父に叱責される。そこから語り手は、林家と鄭家が親族となった経緯を

（六）

記していく。それが第二の時間であり、第一の時間よりも五六十年以前とされる。主な登場人物は林家の祖父と、その周囲の家族、親類たちであり、時に祖父に焦点化して展開される。この祖父は、猟に出た折に過失で従妹の娘の阿宛を殺してしまい、その三年後、末子の嫁の出産の折にその亡霊に悩まされる。そこで祖父は、生まれた子供を阿宛の跡継ぎとすることを約束し、その子に鄭の姓を与えて事を収束させる。その後、物語は第一の時間に戻り、萬壽は部落に戻る一方、猶得が家出をする。それに対して部落の人間は「今までにない部落の青年の心の動き」として驚く一方、萬壽との結婚に心を弾ませる淑花の様子が描かれる。

そのようにこのテキストでは、二つの時間にわたるストーリーが用意され、過去（第二の時間）に関しては、非常に閉鎖的な部落の人間関係が、特に家族関係に集約されて描かれている。そしてそこでは、過失による殺人が生じても、それに警察や行政が関与することなく、最終的には亡くなった女性（阿宛）に養子を与えることで収束する。その一方で、現在（第一の時間）では、そのような歴史をもつ部落に登場した新しい青年像が、自由を求めて部落を出入りする姿として記される。それらを総合すると、このテキストでは、非常に閉鎖的な歴史をもつ部落と、そこに近年生じた変化の双方が表現されているとわかる。それは、共同体に、いわば観察点を設定し、そこで生じた動向を大きな時間の幅のもとに構成した物語として理解できよう。更に重要なのは、そのような表象が、共同体の過去の姿や来歴を示すものでありつつ、しかしそれを郷愁の対象や、近代化のアンチテーゼとしての理想的状態とするのではなく、あくまで変化それ自体を描き、そこで自分自身の生き方を模索し始めた青年たちをクローズアップしている点になる。

第二に『論語と鶏』は、ある村を舞台とし、そこで漢文を教えている書房と、その周囲の出来事を記す。主な登場人物は、書房の先生と、そこへ通う源、及び先生の娘の嬶である。時代設定は「こんな山の田舎でも日本の文明と叫んでゐる時」とされ、時に源に焦点化されつつ展開される。書房では昔ながらの教育法や礼節の指導が行われており、その中で源と嬶の交流も描かれていく。ただし書房の学課は進度が遅く、村の親達からは評判が悪い。かつ、雨が降ると先生は授業を放り出し外出するため、書房は子供たちの遊び場と化す。ある日、村で諍いが生じ、当事者どうしが鶏を斬って自らの正しさを示す儀式が行われる。そのことを聞きつけた先生はそこへ出かけ、斬られた鶏を拾い上げ持ち帰る。それを源は、「意地のきたない」ふるまいとして情けなく思い、嬶に同情もする。その後、村の親達の多くは、教育機関として機能していない書房へ子供が通うことを辞めさせる。

以上のようにこのテキストでは、共同体における初等教育の問題がとりあげられ、村に暮らす子どもの視点と大人の立場の双方から、共同体の中で存在意義や立場をなくしていく書房と、その指導者の姿が描かれている。即ち、大人の立場からは、教育機関としての効率性が問題視され、子どもの視点からは、指導者自身の人格、威厳への疑義が提示されている。なお、このテキストが発表された直前の時期にあたる一九三九年には、書房の全廃が総督府の方針として決定されており(二五)、三九〜四一年に残存していた書房数は、それぞれ一八、一七、七校とされている(二六)。するとこのテキストは、その発表時において消え去りつつあるものをあえてとりあげていることがわかる。ただしそれは、郷愁の対象や、ロマン的な理想状態として書房をとりあげたものではないことも明らかである。そのような物語は、共同体に観察点をおきつつ、共同体の中での存在意義を失っていく存在をそれとして描くものであり、そこからは、それに価値を見出さなくなるという共同体における価値観の変化までが示されるのである。即ちこのテキストは、滅びつつある書房に関して、その背景にある総督府(日本)の教育政策方針の存在をふまえながらも、ただし衰退の要因をその点だけに求めるのではなく、指導者の個人的資質や、共同体の側の価値観の変化、そして漢文教育と社会的要請との不適合といった要素の複合的な連関として提示するものだとまとめられよう。

第三に『夜猿』は、ある山奥を舞台とし、そこの一軒家で祖先伝来の山産物の工場を営む一家の姿が描かれる。主な登場人物は、家の主人の石有諒とその妻、二人息子の民と哲、及び手伝いのお婆さんとその孫の阿美となる。物語は、時に有諒の妻や民に焦点化されながら記される。有諒が商用で家を離れる間、母子の寂しい暮らしと、その中での手伝いのお婆さんたちとの交流が、夕方に山際から住処に帰っていく猿たちの様子を背景としながら描かれる。その後、正月の用意にあわせて有諒が山に戻り、手伝いの若者も呼び寄せつつ竹紙製造がすすめられる。そのようなとき、有諒が街へ出た折に取引先の男と喧嘩をし、身柄引き取りが必要になる。妻は二人の子供を連れて街へ出かけるが、その時「民坊はその母の姿をお猿さんが子供を抱へて逃げるのと同じやうに」思い、「町の商人が憎らしくてならなかつた」という一節が記される。

そのようにこのテキストでは、舞台が山中に暮らす一家にほぼ限定されつつ、そこにおいて自然と近接した一家の暮らしぶりが描かれる。それは、一般的な山村からも隔てられた山中で暮らす最小単位の共同体をめぐる物語といえる。また、有諒が商用で村や街に出かける折には焦点化されない点からも、あくまで山中の一家とその周辺を舞台とし、そこで生じる、あるいはそこに及んでくる外部からの影響を描く

テキストであることがわかる。ただしそれは、自然と近接した暮らしぶりを礼賛するだけのものではなく、そのように村からも隔てられた山奥の暮らしが、都会の人事や経済活動に左右される姿を描いている。即ちそれは、山奥の暮らしに入り込んでいるそれとは異質な要素の存在を示し、山奥の暮らしを均質的な（人事から独立し自然と一体化した）ものではなく描く工夫として理解できよう。そしてそのような一家の、都会と在所を往復させられる姿と、夕方には住処に帰る猿の姿の双方を等価に眺めるような位置に、このテキストでは観察点が用意されていると考えられる。

第四に『地方生活』は、K庄という村落を舞台とする。主な登場人物は東京から帰郷した澤、及び澤の父（王主定）、その親友の楊思廷、そして楊思廷の娘であり澤の許婚者である婉仔等である。物語は、時に澤に焦点化されつつ描かれる。新生活をはじめるにあたり、澤は、父との村歩きから始める。その中で、「台湾独特の手真似」や、上馬下馬等の古い習慣が描写される。その後、結婚式を経て新婚生活が始まり、生活に満足しつつ不安をも感じる澤の心境が記される。その後、婉仔の父が病気になり、澤の家へ呼び寄せて治療することになる。しかし死期が近づき、その折に、淑（婉仔の妹）の結婚持参金をめぐる家族内での諍いが生じる。原因は、父の病気の影響で自分の結婚が遅れ、持参金に関しても不安を抱くようになったためである。それに対して澤が、人間は「各々別々な気持を持つてゐる」とし、事の成り行きは「自然にまかさう」とする認識を抱くまでが描かれる。

以上のようにこのテキストでは、澤の帰郷と定着が周囲と調和的に描かれており、そのことがテキストの基調をなすといえる。このテキストに関して張文薫氏は、澤が「高等教育を受けても就職ができない」一方で、婉仔が「学校教育を受けていない」ものの、漢文は澤よりも達者であり、「田舎」ではるかに「実用的」であることへ注目し、澤の結婚を「伝統価値への回帰儀式」と述べている（二七）。そのような指摘をふまえると、『地方生活』は、共同体を、そこに根付く習慣を前景化しつつ描き出し、それと同時に、郷里へ戻り安定を得ていく主人公を描く物語として基本的には理解できる。ただし重要なのは、そのような傾向の一方で、このテキストには、そのような定着の中で澤が抱く不安や、更には父が危篤になった状況で自らの結婚の持参金に不安を覚える淑の存在も描かれている点である（二八）。そのような事態は、共同体に視点をおき、そこを舞台とした人事を描きながら、ただしそこに調和や安定のみならず、それとは対照的な感情や立場をも描くものだといえる。そしてそれは、共同体に生じる事態を複数の立場や価値観に基づくものとして描く方法として理解できるのである。

（八）

第五に『迷児』は、ある街の路地を舞台とし、そこの家に暮らす一家、及びそれに関わる出来事が中心的に描かれる。一家の主人は件の家の一階の小間物屋の一隅で屋台を経営しており、二階は家主の住居である。一家の末子（阿誠）が行方不明になり、それが四日目に見つかるまでの話が、時折主人に焦点化されつつ三人称的な語りで展開される。ただしその間、登場人物たちは自ら捜索をせず、彼らとその周囲の人物に関する過去のエピソードが記される点が特徴的である。そのエピソードは、屋台を訪れる盲目の夫婦（走唱仔）のこと、戦争が始まってから家主が借家人を追い出せなくなったこと、一家の長女である阿花が一七歳の時家主から醜業をすすめられるが断り、その翌年婿をとり双子が生まれたこと。及びその後家主から反感を買っていること、発達が不十分な阿誠を主人は福の神の使いとして可愛がっていること。周囲では行方不明の届け出が遅れたことから、子殺しの疑いも抱いていること。更には、阿誠の普段の様子や、長女の生んだ双子

と小間物屋の息子との交遊、阿花と主人との生活苦を要因とした対立等である。それらが記された後に、阿誠は生活困難者の受入施設に迷い込んでいたとわかり、以前の路地での生活に戻るまでが描かれる。

そのようにこのテキストでは、ある路地が観察点とされつつ、そこに関わる人物と、それにまつわるエピソードが問わず語り的に連接され、その間に阿誠の行方不明が解決するという展開をもつ。それは、都市の中に設定された共同体の人間模様を前景化した物語として整理できよう。なお、件の末子はテキストの発端と結尾に登場する話題の人物ではあるものの、その姿は一貫して直接描かれない点からも、このテキストの主眼は「田舎から台北へ出てきた」とされ、そこで逼迫した生活を続ける一家の姿を俯瞰的に表象する点にあると考えられる。更にこのテキストの題名も、そのような一家の姿を指したものと理解できよう。そして重要なのは、件の一家をめぐる動向が、相互扶助や互いを思いやる善意だけで構成されているのではなく、その中に悪意や諍い、更には関係者の意思や行動を超えた事態の展開（阿誠の行方不明の解決）等を含む形で描かれ、そしてそのような人間模様やその中の一つ一つの要素に対して、語り手からの価値評価がなされていない点なのである。

以上、これら五作品では、本節の冒頭で述べた設定の共通点に加え、そのような設定のもとで、共同体において生じる事態を複数の立場や価値観が関連するものとし、かつそれら複数の要素に対して、その何れにも肯定的ないしは否定的な評価を明示しないという共通性が確認できる。そのような事態は、『山茶花』における三つの物語から一つを選び出し、それをより純粋な形で展開することで、件の表象傾向を深化させたものとして理解できよう。

Ⅳ 女性の生き方をめぐる物語

この区分に含まれるのは、『辣韮の壺』（『台湾芸術』四〇年四月）、『芸妓の家』（『台湾文学』四一年五月）、『闇鶏』（『台湾文学』四二年七月）、『媳婦』（『婦人画報』四三年八月）の四作品である。女性主人公を設定し、その生き方に関わる枠組みを描き出しつつ、個別の主人公をとりまく状況設定にもとづき、件の枠組みとの関わり方を描く点に共通した特徴を求められる。それは、『山茶花』では娟と錦雲を中心人物として定着されていた女性の生き方をめぐる物語を、更に新たな状況設定のもとで展開するものと考えられる。

第一に『辣韮の壺』は、麓庄の市場で物売りをしている、阿粉婆さんが主人公であり、その市場における言動が中心的に描かれる。他の主な登場人物としては、市場での隣人である中年男の阿九があげられ、阿九とのやりとりが物語内容の中心を占める。なお、作中人物への焦点化は阿粉の夫に少しだけ認められる。阿粉は裕福な暮らしをしており、市場では自分の小遣い稼ぎをしている。普段から「露骨な冗談」を好み、「しゃれすぎる趣き」をもつ点で、「作者」からは「売笑的」との懸念も示される。その一方で、「暴君な男達に圧迫されてゐる女の苦しさ」を代弁し、反抗する点で村中の女性からの支持を得ている人物とされる。そのような阿粉に、阿九はいつも好きなように使われており、テキストの終章における、阿粉の売り物の辣韮の瓶を阿九が割ってしまうという出来事においても、笑って対応される。

そのようにこのテキストでは、周囲の女性の支持を集め、男性と対等以上に渡り合う女性主人公の姿が描かれている。そこで重要なのは、そのような主人公の生き方の背景に、経済的な安定という要素が書き込まれている点である。即ち阿粉は、市場において生活費を稼ぐ必要

をもたず、それ故に売り物の瓶を割られてもそれを笑って済ますことができるのである。そのような物語の設定と展開は、経済的な安定を生き方の枠組みとし、その枠内で個性を発揮する女性の生き方を描くものとして理解できよう。なお、このテキストは『山茶花』の連載中に発表されたものであるが、前に検討した『憂鬱な詩人』とは異なり、『山茶花』以降のテキストとの間に表象傾向の共通性を見出せるものとなっている。

第二に『芸妲の家』は、采雲という女性を主人公とし、芸妲になるまでの経緯や、彼女に求婚しながらもその身分や経歴に懊悩する楊秋成との関係が、時に采雲や秋成に焦点化されつつ描かれる。他の主な登場人物としては、采雲の養母がおり、折にふれて采雲に身売りをさせようとする。采雲は幼少時に産みの母から売られ、一六歳の時に老人に身売りをさせられる。その後恋人が出来るが、件の事情を知られて破談になり、そこで芸妲になる。その中で貞節を守りつつ楊と出会い、その後、台北に戻り一年間だけの約束で芸妲を続けるが、再び養母に身売りをするようにすすめられる。テキストの最後には、自身を身重になったのでは、と思う采雲の姿と、「かう云ふ社会に於ける自殺は今の所唯一の打開策ではないか」という内話が記される。

以上のようにこのテキストでは、采雲の半生を、その過程における養母の存在の大きさを浮き彫りにしつつ描いている。なお張文環は、「老娼撲滅論」（『民俗台湾』一九四三年一一月）において芸妲階級の存在を社会問題とし、その根源を、媳婦子制度を独善的に活用する老娼に求めている。そして『芸妲の家』では、そのような老娼と共通性をもつ養母の存在から逃れることの困難さが、作品の最後でそこからの脱出口を「自殺」に求める点に示されているといえる。即ちこのテキストでは養母の存在が采雲の生き方の枠組みとされており、その上でその限界を超えようとし、しかしかなわずにいる姿が描かれているのである。

（十）

第三に『闘鶏』は、月里という女性を主人公とし、しばしば彼女に焦点化されて語られる。設定は「台湾の歌劇の全盛期」であった「大正十三年」とされ、その他の主な登場人物として、夫の阿勇、及び三桂（阿勇の父）、清漂（月里の父）等がいる。月里は村祭の際に「男女が相慕ふ踊り」の女性役を引き受け化粧をして大勢の前で演じるが、そのことを兄に非難される場面から物語は始まる。その後、月里と阿勇の父親の代における因縁が語られる。阿勇の実家は福全薬房といい、窓の脇には木彫りの闘鶏（去勢鶏）を縁起物として置いていた。清漂は、駅の建設に関わる土地購入を三桂にすすめ、娘の嫁入りとも引き換えに薬房を手に入れる。その後三桂の家は経済的に没落し、阿勇は両親を失う。それを機として阿勇と月里の生活も困窮し、阿勇はマラリヤに罹り発狂する。月里は、そのような状況で援助をしない父と兄に反感を抱き、「両親への面あてにもなる」として無頼な生き方に転じていく。その一端が右の踊りの件りであり、その後月里は、手伝いに通っていた家の、足が不自由で絵を描く阿凛と人生を論じるようになる。そして彼の絵のモデルになりつつ、社会的マイノリティとしての同志意識のもと心中に至る。

そのようにこのテキストでは、家の意志による結婚の後に援助を断つ実家との関わりや、そこで夫が発狂するという状況が描かれ、更に障碍を抱える男性と出会い、共感を抱き心中するという次第が記される。即ちこのテキストでは、家の継承・繁栄のために女性は存在するという価値観が、まずは月里の生き方の枠組みとして設定されており、しかしそこから期せずして逸脱した主人公（二九）が、そこから件の価値観を超越した独自の生き方を選び取っていく次第が描かれている。

それは、件の枠組みを超えたところで展開され得る生き方を物語として試行する一例として理解できる。

第四に『媳婦』は、阿蘭という女性を主人公とし、彼女が三歳のときに媳婦子となってからの動向が主に描かれる。他の主な登場人物としては、彼女の夫になる予定の楊阿全とその両親、及び公学校での阿全の友人等があげられる。物語は公学校時代の回想からはじまり、阿蘭と阿全に時折焦点化されながら記される。阿全が友人に阿蘭の存在を冷やかされ、友人と喧嘩をし、そこから阿蘭は退学させられ「卑屈」になり、「阿全のまへで自分の姿を綺麗につくろふのが口惜し」いと思うに至る。成長して阿全は台北へ行き、家に戻らなくなるが、一方で阿蘭は、家でも村でも評判の良い娘になっていく。ある時家出中の阿全が父に借金を申し込むが、それを父は黙殺し、阿全は阿蘭の実家に身を寄せる。そのような阿全に対し阿蘭は「彼以外の男は一度も考へたことがない」と記され、阿全への思いを強調されることでテキストは終わる。

以上のようにこのテキストでは、阿全とは幼少期以来の不仲ではあるものの、成長につれて両親や周囲からの好評を獲得し、自らの立ち位置を確固としたものにしていく女性の姿が描かれる。なお張文環は、右にもとりあげた「老娼撲滅論」において、媳婦子制度がもつ問題点に地域差という観点をとりこみ、「北部は媳婦仔の商売をしてゐるものが多い」として中南部と北部での違いを指摘し、特に南部では不幸な人身売買とは異なる制度の活用がなされていることを述べている(三〇)。『媳婦』は、この主張を小説において展開した――即ち、媳婦子という立場・状況を阿蘭の生き方の枠組みとして用意しつつ、その状況に対応し自己実現を果たしていく女性の生き方を描いた――ものと理解できよう。

以上、これら四作品では、本節の冒頭で述べた設定の共通点のもとで、女性主人公における自らの生き方の枠組みとの関わり方について、その枠内で安定したポジションを確立し、周囲と調和的な生き方を獲得していくものや、枠組みを乗り超えようとしてかなわないもの、更には期せずしてそれを乗り超えてしまったところで独自な生を営む姿が展開されていた。そして重要なのは、その生き方が、主人公の一貫した意志により選びとられているものではなく、主人公をとりまく経済的、あるいは社会的な条件との関わりにおいて生み出されていることである。と同時に、これらのテキストでは、それぞれの女性主人公の生き方をめぐり特定の評価のスタンスが示されていないことも見逃せない。そのような事態は、『山茶花』における女性の描き方に端を発しつつ、それを更に多様な設定や状況との関わり方において深化させたものと理解できるのである。

V 進路選択をめぐる物語

この区分をなすのは、『頓悟』(『台湾文学』四二年三月)一作品である。そしてそれは、『山茶花』における、賢の進路選択をめぐる物語に端を発しつつ、ただしそれが共同体を基盤としない形で展開されたものとして理解できる。またこのテキストは、一人称の語りで構成されている点が、張文環の日本語小説の中で稀有なものであり(三一)、更に、このテキストの背景には、一九四一年六月に実施を発表された陸軍特別志願兵制度との関わりが明確に存在する(三二)。

『頓悟』は、「私」(王爲徳)の一人称による語りで構成されており、時に饒舌なモノローグや、自分自身の心理分析も取り入れつつ、志願に至るまでの動向が記される。その他の主要な登場人物として、「私」

の職場の主人や、阿蘭という幼馴染があげられる。テキストは、「私」と同じく商売の修行に来た店員たちの雑魚寝の場面から始まり、その後の職場生活の中で、主人からの出世と金儲けのすすめに影響されつつ、それに疑問も抱く日々を送る。その中で阿蘭と再会し、彼女に恋情を寄せると同時に、自分のみじめな姿を意識し、本を読むようになる。そのような折に志願兵制度が発表され、それに応募する。その動機は「精神生活」の「飛躍」、及び「社会と云ふ密林を突き破るため」とされる。「私」は阿蘭にそのことを告げにいくが、そこで阿蘭の傘に、勤め先の主人のマッチの火で穴が開いたエピソードを聞き、貧しさは些細な出来事も大事件にし得ることを嘆く。そこで阿蘭をはげまして自分も気を取り直し、「一切を振りすて、飛躍したい気持」を改めて抱くまでが描かれる。

以上のようにこのテキストでは、「私」が志願兵を志し、その思いを固めるまでのプロセスが、閉塞感からの脱出を軸として定着されている。そして志願を決意するまでの過程は、以前からの熟慮の結果などではなく、個人的な状況と社会的なそれが偶然に接点をもったタイミングで「頓悟」――急に悟りを得ること――の如くになされるものとなっている(三三)。なお、『頓悟』に先行して発表された周金波『志願兵』(四一年九月)は、「私」による一人称の語りで構成され、明貴と進六という登場人物の「日本人になる」ための議論が物語の中軸をなし、その後に進六が血書志願をするという展開をもつ。そこで志願の理由は明記されないものの、「日本人になる」というテーマとの関わりは明確に提示されているといえる。その点を比較しても、『頓悟』における進路選択の偶発性は際立つといえよう。

そのような点で『頓悟』は、『山茶花』に認められた表象傾向――進路選択に関わるストーリーにおいて、終始一貫したビジョンや強固な意志が必ずしも存在するのではないという点――を継承しつつ、更に、その選択に至る過程の唐突さや閉塞感からの脱出という性格を強調しながら、同時にそれが複数の要素の偶然的な結びつきによってなされていることを、時代状況とも密接に関わらせた形で描き出したものと考えられる。

Ⅵ　まとめと終章

以上本論では、張文環の日本語小説を区分し、それぞれの区分における特質と、それらの関連性を明らかにしてきた。それは、『山茶花』における、共同体を舞台とする物語を基盤とし、その上で更に、女性の生き方をめぐる物語と、進路選択をめぐる物語が定着されるという事態に端を発する。そしてそれ以降の短編作品に関しては、『山茶花』における三つの物語がそれぞれ独自の状況設定のもとで展開・深化されたものとして整理できた。それは、『山茶花』と並行して発表された『憂鬱な詩人』に認められる方向性とは全く異質なものである。そしてそれらに通底しているのは、個々のテキストにおいて主に描かれる対象が、単一の方向性をもつ、あるいはそれに収束される均質的なものとして構成されるのではなく、異なる方向性をもつ、複数の要素の偶然的な連関によって織り成されたものとされている点である。それはまた、張文環の日本語小説の多くが、特定の主人公が何かを得る、あるいは何かになるという形で要約できるものとはなっていないこと、更には「教養小説」的な側面をもつ『媳婦』や『頓悟』においても、それ以上に重要な要素が構成の要件とされているということを意味する。

確認するならば、Ⅲ節で検討したテキスト群では、共同体のありよ

うやそこでの営みの内実が複数の立場や動因によって成り立つものとして描かれており、Ⅳ節で論じたテキスト群では、女性主人公の生き方が、主人公自身の意向と、その生き方の枠組みをなすものとの関わりにおいて記されていた。そしてⅤ節で検証した『頓悟』では進路を決定するまでの内面の動向が、様々な事情や志向と、時代状況との偶然的な関わりの結果として構成されていたのである。

そのような張文環の表象は、「一九世紀の写実文学」的な性格をもつ「台湾民衆の四季の風俗や習慣についての描写」(三四)に止まるものではなく、「台湾に於る最も広汎なる生活層の姿」(三五)を素材としつつも、それを特定の傾向をもつ関連性の中に定着する――即ち対象を異なる方向性をもつ複数の要素の偶然的な連関によって構成されたものとして表象する――点で、きわめて構築的なものだといえる。そして更に重要なのは、そのような表象において主人公の生き方や主題的な事象に対する特定の評価が伴われないことである。

例えばⅢで論じたテキスト群から『部落の惨劇』と『論語と鶏』をとりあげるならば、これらはともに消え去りつつある習慣や状況を表象しつつ、しかしそれを郷愁の対象とすることなく、ただ過ぎ去るものとして描いていた。またⅣで論じたテキスト群からは『芸妲の家』と『闘鶏』に注目するならば、それらはともに、環境の中で生き方を制約される女性主人公を描きつつ、そのような状況の改善やそのための方法を提示することは果たさないものだといえる。そしてⅤで検討した『頓悟』については、主人公における志願の選択が、英雄的もしくは非日常的な決断として定着されていないものであった。

すると、そのような表象は、あらかじめ語り手からなされる対象への価値付けを回避するものであり、そのことによって読み手の側に件の対象について自主的に考察し評価をする余地を担保する(三六)側面をもつことが理解できるようになる。それはまた、そのような表象を通じて読み手へ件の対象――それは、複数の要素の連関によって構成されている――について考えることを促す行為遂行的なはたらきかけとしても換言できるだろう。そしてそのような試みを継続的に行う対象として張文環において選ばれたのが、『山茶花』に端を発する、共同体、女性、進路選択という局面であったと考えられる。

そのような行為遂行的性格を、張文環の日本語テキストにおける表象傾向の特色として見定めるとき、その意義は如何なるものとなるだろうか。

それを考察するために、本論がⅡで確認した一九四〇年半ば以降の「台湾文化」をめぐる時代状況に関する、その後の展開に改めて目を向けよう。特に重要なのは、アジア太平洋戦争の開始(一九四一年一二月)以降、台湾の南進基地化(三七)が、兵士や物資の供給地、及び南方経営の前進基地としての役割において実質化していく点である。この時期に、台湾総督府の監督が拓務省から内務省へ移行(四二年九月)し、台湾は「内地」化され、日本帝国内における台湾の新たな地位が確立していくことになる(三八)。そのような状況を背景として、一九四二年以降、皇民化政策と戦時動員が強化されるのだが、その一方で特に文化面においては、Ⅱでふれた「皇民奉公会」の設立後も、それ以前よりは局限されながら、大政翼賛会の地方文化振興策に支えられた「地方文化運動」が(四〇年後半以降の動向からの展開として)継続され、台湾の独自性や民族性を掘り起こす試みが確保されつつ進展していくことになる(三九)。

そのように「台湾文化」をめぐる時代的要請が、その内実を変化させつつもその重要性を保ち続けた時期において、張文環は一九四〇年一月に連載を開始する『山茶花』以降、四三年までその表象傾向を分

有させつつ、ただし基本的な部分では変化させずに、貫くことができたのである。それは、同時期の日本語作家の一人である龍瑛宗が、この時期に三つの異なる表象傾向を創り出し、時代状況への対応を続けていった(四〇)のとは対照的な事態となる。そのような点から本論では、張文環が、そのような時代状況の中で、「台湾文化」と関わる側面を保ちつつ(四一)、『山茶花』で確立した表象傾向を出発点として、読み手に「台湾」や「台湾人」をめぐる三つの問題系――共同体、女性、進路選択――の存在を示し、同時にそれについて考えさせる試みを継続した作家、という視座を提示したい。そのような視座は、例えば陳芳明氏が述べた「この時期張文環は、台湾人の精神を擁護したのか、それとも台湾人の魂を売ったのか、検討に値する」という見解(四二)に対して、その何れにも収束しない(小説の表現分析から導き出される)第三の解答の可能性を提示するものとなり、その点において、本論が「はじめに」でふれた張文環研究の動向に対し新たな知見を付け加えることができると考える。

そして更に、これも「はじめに」でとりあげた藤井省三氏の見解を改めて想起したい。すると、藤井氏の述べた、日本語文学を通じた「共同意識」、及びその発展としての「ナショナリズム」の形成過程に関して、当時の代表的な台湾出身の書き手の一人により、件の読み手へむけた行為遂行的な営みがなされていたこと。即ち、感情的な「共感」を時には通過点としつつ、その先にある理知的な対象への関与を導き出そうとする試みがなされていたことを本論では示し得たと考える。もちろん、一九四〇年以降の時期に「台湾文化」に関わる表象を展開することは、藤井氏の述べた「ナショナリズム」の形成に寄与するものともなり得る。ただし重要なのは、本論が検討してきたように、張文環の小説が、「台湾文化」の表象と関わりつつも、それを第三者的

に受容するように求めるのではなく、それに関して読み手が考えることを可能にしておき、それに対して思考を継続させていく端緒ともなり得ている点である。そして、そのような思考がなされる時、それは個人としての対象に対するスタンスの形成――「台湾」に関わる問題を主体的に考える個人の確立――につながる営みとなるだろう。即ち張文環の試みは、「台湾文化」に関与する点でナショナリズムの形成にある意味では寄与しつつ、ただしそれを通過点として、その先にある個人の確立というレベルを志向し、そこにアプローチしている点にその要諦を求められるのである。

一九四〇年代前半の台湾において、以上のような試みが日本語によって行われていたこと。そのような事態がもつ意義については、同時代における他の日本語作家の表象傾向を視野に入れ、その結果を蓄積していくことでより明確となるだろう。そしてそれは同時に、個々の日本語作家における日本語への関わり方の多様性に光をあてていく営みともなる。そのような作業を通じて、一九四五年以前の台湾における日本語文学の姿と意義を更に明確化していくことを今後の課題としたい。そしてそのような検討は、同時期における朝鮮や「満洲」における日本語文学の動向、更には「内地」における文学をめぐる諸問題の考察へも波及する有益な営みになり得ると考える。

注

(一) 本論では、柳書琴・陳萬益・中島利郎編「張文環著作年譜」(『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集四』緑蔭書房、一九九九年)中で、件の時期に発表されたテキストのうち「小説」とされている一二作品を検討の対象としている。

（二）論者においては、既に龍瑛宗の場合を検討した論考がある。「龍瑛宗の日本語文学作品における表象傾向と、その変化をめぐって」（『日本近代文学会北海道支部会報』一九号、二〇一六年）参照。

（三）注二であげた拙論では、三九年から検討を開始している。この開始時期の差は、日本語作品を定期的に発表しはじめるタイミングの違いによる。

（四）そのような状況で張文環が四四～四五年八月までの間に残した日本語小説は、『土の匂ひ』（『台湾文芸』一九四四年七月）、及び「情報課委嘱作品」と題される『雲の中』（『台湾文芸』一九四四年一一月）の二作品である。また、四四年はじめ頃に、張文環が台北から台中の霧峰に転居していること（張文薫「派遣作家としての張文環」『台湾の「大東亜戦争」』東京大学出版会、二〇〇二年、参照）も、発表作品数の減少に関して考慮すべき事柄となろう。

（五）葉石濤著、中島利郎、澤井律之訳『台湾文学史』（研文出版、二〇〇〇年、六九頁）参照。

（六）柳書琴著、中島利郎訳「張文環『山茶花』解説」（『台湾長篇小説集二』緑蔭書房、二〇〇二年、三八一頁）参照。なお氏の論考では、張文環のテキストに頻出する「山村」と「女性」を、「共に受難の母「台湾」及び「台湾人」を隠喩した」ものと指摘している。本論の眼目は、張文環が日本語小説で描く「山村」や「女性」が「台湾」のメタファーとして理解できる可能性は担保しつつ、それらが『山茶花』以降のテキストにおいて、どのように継承、展開されていくのかを具体的に検討する点にある。

（七）藤井省三「ある日本語作家の死」（『台湾文学この百年』東方書店、一九九八年、一六一～一六二頁）、及び「〝大東亜戦争〟期における台湾皇民文学」（同書、六二～六七頁）参照。

（八）そのような問題は、同時期における朝鮮や「満洲」における日本語文学をめぐる事態については見出し難く、台湾における日本語文学をめぐる諸問題を考察する上で重要かつ独自な観点だと考えられる。

（九）王姿文「日本統治期日台文学における「憂鬱」の系譜」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』一四号、二〇一一年、六一頁）より。

（一〇）注五と同じ。

（一一）そのようなモダン的傾向が張文環においてどのように形成されたのかについては、別の検討課題としたい。

（一二）連載開始に先立ち『台湾新民報』に掲載された「作家の言葉」（一九四〇年一月二一日）には、「三十歳以上」の台湾人が共通して経験してきた「古い田舎生活」を素材として、「和文」によって「吾々の生活に近しい文学」を創り出すことを努力目標とする旨が記されている。なお、この特輯で『山茶花』以前に掲載された小説は、翁鬧『港のある町』、王昶雄『淡水河の漣』、龍瑛宗『趙夫人の戯画』、呂赫若『季節図鑑』となる。

（一三）陳淑容著、星名宏修訳「日本語読書大衆に向きあって　一九三〇年代後期「新鋭中篇創作集」の歴史的考察」（『言語社会』七号、二〇一三年、九四頁以下）参照。この論文では、『山茶花』について、「植民地下における啓蒙、成長とアイデンティティをめぐる青年たちの歌を展開」すると同時に、「文学の通俗化と大衆の消費文化が結合した典型的な例」だと指摘している。その具体例として、『山茶花』の好評をうけて、ある喫茶店が店名を「山茶花」へと変更した例が紹介されている。

（一四）「孟麗君」と「映雪」は、台湾における民間の歌謡劇である歌仔戯の登場人物である。そして「マノン・レスコオ」は、一八世紀フランスの作家アントワーヌ・フランソワ・プレヴォーの長篇小説（『隠遁したある貴族の回想と冒険』中の第七巻、一七三一年刊行）、及びその女性主人公の名である（中川信「プレヴォー」『集英社世界文学大事典　三』集英社、一九九七年、八五〇頁より）。

（一五）注六にあげた柳書琴論文では、これらが何れも「劇的運命を具え個性に満ちた女性達」のストーリーだと指摘され、「孟麗君」と「映雪」が登場する歌仔戯のあらすじも紹介されている。重要なのは、『山茶花』に登場する娼や錦雲が、むしろそれとは反対に、生き方を自由に選べず鬱屈する側面をもつ女性として描かれていることである。その点で、これらのタイトルは、反語的に『山茶花』の物語内容の狙いを際立たせるものとなっているともいえよう。例えば、「⑦交流」での、賢の新しい下宿先での出来事や、「⑩未

亡人」での、錦雲が嫁ぎ先の姑と折り合いが悪いことを記す場面などを参照。

（一六）そのような語りの方法は、武田麟太郎の『日本三文オペラ』（『中央公論』一九三二年六月）における「あづまアパート」や、『銀座八丁』（『朝日新聞』一九三四年八～一〇月）における酒場「ロオトンヌ」などに認められる、特定の場所に集う人間たちと、その間で展開される人間模様を描く趣向と類縁性を見出せる。この趣向から、更に観察点を固定しつつ、舞台を都市のみならず農村にも拡大したものとして、張文環の方法を理解することもできよう。件の武田の方法から影響をうけつつ更なる精密化を果たした先行例としては、伊藤永之介の『梟』（『小説』一九三六年九月）や『鶯』（『文芸春秋』一九三八年六月）等における、農村の中の特定の場所に視点を設定し、そこに集まる人物と、そこで生じる出来事を定点観察することで物語を浮上させる方法も存在する。なお、同時代の台湾における日本語作家である濱田隼雄の『横丁之図』（『文芸台湾』四〇年七、一〇月）、『公園之図』（『文芸台湾』四一年三月）等の作例との比較については今後の作業としたい。

（一七）ここで整理した、女性の生き方をめぐる物語と、賢の進路選択に関する物語については、ともに張文薫氏の先行研究がある。前者については、台湾新文学における「新しい女性」や「恋愛」に対する描写と比較して、むしろ村に残された女性を恋愛の対象とし、恋愛を新知識人が失ったアイデンティティの回復手段としようとしたテキストが『山茶花』であると論じている。ただしそこで女性をめぐる現実を変えようとする指向はなく、文学における実用性を抜き去った点がこのテキストの特徴である、とも述べている（「日本統治期台湾文学における「女性」イメージの機能性」『日本台湾学会報』七号、二〇〇五年、九九頁以下）。また後者については、張文環における「立身出世」をテーマとしたテキスト群のひとつとして『山茶花』をとらえ、「現代文明、立身出世への憧憬から郷土への価値回帰」を試みたものとして、このテキストを位置づけている。ただし、賢にとっての故郷は「現時点の自分の位置と比較して「昔のまま」という雰囲気を具えたある場所」

（一八）として概念化されており、最終的には「学問の道を歩み続け、それによって娟への恋情や故郷アイデンティティ」を一切捨てる、とする（「立身出世を求める青年たち」『日本台湾学会報』四号、二〇〇二年、六五頁以下）。何れも『山茶花』を理解する上で重要な指摘だと考えるが、本論が注目している、共同体を舞台とした物語を基盤とするという『山茶花』の性格は必ずしも重要視されていないといえる。本論の眼目は、その点に注目し、そこからそれ以降の表象傾向を追跡していく点にある。

（一九）それらは部分的に重なる要素をもつ区分となる。即ち、本文で述べたaとb、あるいはaとcが共存すると理解できるテキストもある。そのような場合、個々のテキストにおいて、より主眼が置かれていると理解できる側に区分している。そのような事態は、三つの物語の発端となる『山茶花』において、件の物語が一つのテキストの中で、包括的もしくは相互浸潤的な関係で存在していることにも対応すると考える。

（二〇）その当初においては、近衛文麿のブレーンであった「昭和研究会」の思想傾向がある程度反映され、「東亜協同体論」構想に認められるような自由主義的な政策傾向が保持されていたとされる。詳細については、米谷匡史「戦時期日本の社会思想」（『思想』八八二号、一九九七年）、「日中戦争期の天皇制」（『総力戦下の知と制度』岩波書店、二〇〇二年）を参照。

（二一）柳書琴著、中島利郎訳「戦争と文壇」（下村作次郎ほか篇『よみがえる台湾文学』東方書店、一九九五年、一一七頁以下）参照。その活動は「総動員体制」を「台湾の実情」にあわせて定着させることを目的としていた。そしてその特徴としては、「日本の南進政策の中心的組織としての性格」を次第に強くもつようになったこと。及び「多民族国家の多い、東南アジア進出のモデルとされ、民族共和的組織の性格」を強くもったこと。そして「動員を宣伝・普及させるとともに、日常生活を通じて」動員を「監視」し、動員を「徹底化させるための組織」であったことがあげられる（上杉允彦「皇民奉公会について（三）」『高千穂論叢』二四巻二号、一九八九年、一三二～一三三頁参照）。

（二二）橋本恭子『『華麗島文学志』とその時代』（三元社、二〇一二年、三四九頁）参照。なお、「外地文学」と「台湾文学」は、島田謹二が四〇年半ば頃まで、在台日本人による文学と台湾人による文学として使い分けていた用語であるが、次第に台湾文壇においてそのような区別なしに使われるようになったと指摘されている。

（二三）そのような評価に発刊当時の『台湾文学』によるイメージ戦略が影響していることについては、垂水千恵氏（『呂赫若研究』風間書房、二〇〇二年、一九七～二〇三頁）や和泉司氏（『日本統治期台湾と帝国の〈文壇〉』ひつじ書房、二〇一二年、一七三頁以下）の指摘がある。

（二四）注六にあげた論文のうち、三五六～三五七頁参照。

（二五）呉宏明『日本統治下台湾の教育認識』（春風社、二〇一六年、三三～三四頁）より。

（二六）台湾総督府文教局編『昭和十六年度版　台湾の学校教育』（台湾総督府文教局、一九四二年）中の「最近十年間幼稚園・書房概況」（一二三頁）より。

（二七）注一七にあげた張文薫論文のうち、「立身出世を求める青年たち」（七〇頁以下）を参照。

（二八）張文薫氏によると、『地方生活』では、「淑＝現代的」、「婉仔＝伝統的」という対比が作られており、女性は「進学すればするほど近代文明へ接近し、女性の伝統的美徳」が消滅することが描かれていると解釈されている（注一七にあげた「立身出世を求める青年たち」七二～七三頁参照）。

（二九）このテキストのタイトルともなっている闘鶏が家の繁栄を祈願するシンボルであり、それをもてあそぶ発狂した夫が描かれているテキストの結尾は、以上のような展開を反語的に際立たせているといえよう。

（三〇）この主張が掲載された『民俗台湾』では、「媳婦仔、養女制度」が特集されており、張文環のほか、池田敏雄、呉新栄、呂赫若等も寄稿をしている。

（三一）そのように例外的な一人称の語りが採用されたことによる効果としては、次の二点が考えられる。第一には、一人称の饒舌な語りの中に、志願の要因となる雑多な状況や要素を取りこみつつ――三人称的かつ客観的な語りでは、それらが進路決定に関する確定的な要因として記述され得るのに対して――それらが必ずしも確定的な要素とならないことを示し得ている点。第二には、同じく一人称で構成された先行テキストとなる、周金波『志願兵』に対する批評的な関わりを示しやすくなる点である。

（三二）一九四〇年以降の張文環における日本語小説については、従来、時局と殆ど関わりをもたない点が、その特質として指摘される一方で、エッセイや座談会における発言がもつ時流への積極的な関与が指摘されてきた（野間信幸氏の論考のうち、例えば「張文環の戦争協力と文学活動」『台湾の「大東亜戦争」』東京大学出版会、二〇〇二年のうち、一一〇頁以下を参照）。小説でありつつ、同時代状況と直接的に関わりをもつという点でも、『頓悟』は張文環の日本語小説の中で独自な性格をもつといえる。

（三三）『頓悟』で描かれる、生活の閉塞感から南方への志願兵を志すという展開は、その後の台湾文学において一つの類型をなし、それは、それ以前の「北方憧憬」（東京への進学）と対をなす、新たな進路選択の物語のパターンとなったことが、李郁蕙氏によって指摘されている（『日本語文学を読む』東北大学出版会、二〇一四年、一五一頁以下参照）。そこでは、龍瑛宗『南に死す』（『台湾時報』四二年九月）、呂赫若『合家平安』（『台湾文学』四三年四月）『清秋』（単行本『清秋』清水書店、四四年三月）等の作例に言及されている。

（三四）注五と同じ。

（三五）「輝やく「台湾文化賞」」（『台湾日日新報』一九四三年二月七日朝刊、三頁）より。これは、張文環が「台湾文化賞」を受賞した際に「審査概要」として公表された受賞理由の中の一節である。

（三六）そのような傾向は、同時代評において、主題の不明確さや構成の不備として批判される点でもあったといえる。例えば、渋谷精一「文芸時評」（『台湾文学』一九四二年二月）では、主に『論語と鶏』『部落の惨劇』をとりあげつつ、前半と後半のつながりの希薄さに注目し、共通して「一貫した流れのない」ことを問題としている。

（十七）

また楊逵「台湾文学問答」（『台湾文学』四二年七月）では、主に『藝妲の家』『夜猿』をとりあげて、「あれもこれもと言ふやうに、欲張るので、終にはテーマがボヤけてしまふ」、あるいは（『夜猿』の結末について）「案外さう深刻な印象を残さないのはどうしたことであらう？　思ふに、これは、この作品が焦点をとらへなかつたところにあらうと思ふ」と述べている。更に黄得時「輓近の台湾文学運動史」（『台湾文学』四二年一〇月）では、一九四〇～四二年に発表された張文環の小説テキスト全般を対象として、「殆んど全部台湾の田舎に取材し、本島の風俗習慣を極度に芸術的に描写してゐる」、あるいは「どの作品にも郷土の血と匂ひが脈打つてゐる」としつつ、龍瑛宗と比較して「題材に溺れてイデエを喪失する場がある」とする。そして工藤好美「台湾文化賞と台湾文学」（『台湾時報』四三年三月）では、張文環のテキストの多くに通底する事態として、「自然主義リアリズム」に近く、「現実自身のもつ芸術的効果」を重視しているが、「明確な筋を中心とした緊密な構成の欠如のため、ある漠然とした大きな圧力を感じさせ」、「それが散逸して一つのはつきりした焦点に集まらない」点を指摘している。

（三七）この方針は、三〇年代以降の台湾総督のスローガンであり、四一年六月には第二次近衛内閣の閣議決定としても提唱された。

（三八）後藤乾一「台湾と南洋」（『岩波講座　近代日本と植民地二　帝国統治の構造』岩波書店、一九九二年のうち、特に一六四～一六六頁）参照。ただしそれは一方で、「在台湾日本人」の間において「南方工作」から台湾が排除されることに対する危機感や、それをも要因の一つとして台湾の「経済的自主化」を求める「在台邦人ナショナリズム」の発生までをもたらしたことが、氏の論考で指摘されている。

（三九）そのような営みの代表となり得る台湾民俗学の動向に関しては、『民俗台湾』が四五年一月まで定期刊行を続ける点を確認しておこう。その次第については、呉密察著、食野充宏訳「『民俗台湾』発刊の時代背景とその性質」（藤井省三ほか編『台湾の「大東亜戦争」』東京大学出版会、二〇〇二年）や、阿部純一郎「戦時下台湾における三つの「地方文化」構想」（『ソシオロジ』五四巻二号、二〇〇九年）を参照。特に阿部論文では、「皇民化運動と地方文化運動との軋轢」が「総督府内の皇民奉公会と文教局との争いとして継続」する中での『民俗台湾』の動向が分析されている。

（四〇）注二と同じ。

（四一）そのような側面は、「本島文化の画期的躍進」を意図して制定された「台湾文化賞」を、「台湾に於る最も広汎なる生活層の姿を忠実正確に表現」したという理由で授与されたこと（注三五にあげた新聞記事を参照）からも明らかだろう。それ故に張文環は『山茶花』で確立した表象方法を、その後の時代状況の中でも貫くことができたと考える。

（四二）陳芳明著、下村作次郎、野間信幸、三木直大、垂水千恵、池上貞子訳『台湾新文学史　上巻』（東方書店、二〇一五年、一九七頁）より。

（十八）

［付記］

本論は、科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号二五七七〇〇九〇）の助成を受けた研究成果の一つである。引用に関しては、基本的に、初出紙を底本とした『日本統治期台湾文学集成二』（緑蔭書房、二〇〇二年）、及び初出誌の誌面を集成した『日本統治期台湾文学台湾人作家作品集四』（緑蔭書房、一九九九年）に依拠し、可能な範囲でその原典も確認した。ただし『憂鬱な詩人』と『迷児』は、右の作品集に収録されていないため、本文に出典を記した初出誌に直接よっている。なお、適宜旧字を新字に改めている。また、同時代状況、及び先行研究に関して、注二にあげた拙論中の記述と一部重複するところがある。